



麦類は種期の栽培管理

令和3年産の麦類は、は種が遅れたり碎土が不十分だったりしたほ場では冬期の乾燥による発芽不良や出芽のばらつきがありました。1月以降は高温傾向となり、生育は回復しましたが、大麦では初期生育が停滞したほ場では遅れ穂の発生がありました。

収量は平年並みからやや少収、品質は登熟後半から収穫期の降雨によりやや低下しました。

1 ほ場準備

○地方の維持のため、稲わらや堆肥を積極的に施用しましょう。稲わらすぎこみの初年目〜3年目までは分解促進のため、石灰窒素を10aあたり20kg施用しましょう。

○作土層が浅いと、保水力が小さいため、登熟期の高温乾燥に弱く、枯熟れ症状が起きる原因となります。根域を広げるため、作土深20cmを目標とし、

毎年2〜3cmずつ深耕しましょう。

○碎土率（直径2cm以下の土塊の割合）が低いと、種子の吸水にムラが生じ、発芽が不斉一となり、除草剤の効果も低下します。丁寧に碎土し、碎土率60〜70%以上を目標としましょう。

2 施肥

○麦類は酸性に弱いいため、石灰質資材

表1 水田ドリルまきでの施肥量 (kg /10a)

品種	基肥	追肥
	化成肥料 444 (14-14-14)	化成肥料 17-0-17 (17-0-17)
さとのそら	60 (〜70)	12 (〜24)
あやひかり	60 (〜70)	12
彩の星	50	12
すずかぜ	50	12

表2 基肥一発体系での施肥量 (kg /10a)

品種	軽量さとのそら専用 (22-10-10)
さとのそら	45

を施用し、pH 6・5以上を目標に酸度矯正しましょう。特に、新しいほ場で麦類を作付する場合は事前に土壌診断を行い、必要量の資材を施用しましょう。

○基肥及び追肥は、適正量を施用しましょう（表1、2）。

3 排水対策

○湿害を防ぐため、明きよ（排水溝）を、ほ場の外周と5〜10m間隔に施工し、排水口へつなげるようにしましょう。

○は種期が最も湿害を受けやすいため、は種前に設置するのが効果的です。

4 は種

○大麦は11月5日〜20日、小麦は11月10日〜25日がは種適期です。早まきは凍霜害等のリスクが高まります。ただし、は種の時期に降雨が予想される場合は、作業を見送り、適期よりも遅まきになった場合は、慣行よりもは種量を増やし、初期生育の遅れをカバーしましょう。

5 雑草防除

○は種後、土壌が乾燥している場合は、ローラーで鎮圧し、水量を多めにし、土壌処理剤を散布します。

○降雨等で、適期に土壌処理剤を散布できない場合は、麦の出芽直後に使用できる茎葉兼土壌処理剤を使用しましょう（表3）。

表3 除草剤の例（令和3年8月27日現在の登録内容）

使用方法	農薬名	使用時期（一部抜粋）
土壌処理剤	クリアターン乳剤／細粒剤F※	は種直後
	ロックス	は種後〜発芽前
	トレファノサイド乳剤／粒剤 2.5	は種後出芽前
	ゴーゴーサン細粒剤 F	
茎葉兼土壌処理剤	ゴーゴーサン乳剤	大麦：は種後出芽前 小麦：は種後〜麦2葉期
	ボクサー	は種後〜麦2葉期
	リベレーターG	
	リベレーターフロアブル	は種後〜麦3葉期

※クリアターン乳剤（細粒剤F）は、ロックス、ゴーゴーサン細粒剤F（乳剤）と同一成分を含みます。

ラベルをよく読み、登録内容にしたがって使用しましょう。使用記録は必ずつけ、飛散防止に努めましょう。